
Chanter Ciné
ダージリン急行
THE DARJEELING LIMITED

THE DARJEELING LIMITED
TRAVEL ITINERARY

INTRODUCTION

ハリウッドはおろか、世界が今もっとも注目する監督のひとり、ウェス・アンダーソン。ファンを熱狂させた『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』、『ライフ・アクアティック』に続く彼の待望の新作は、大人になりきれない3兄弟が“ダージリン急行”に乗って魅惑のインドを旅する、希望と再生のロードムービーだ。

父の死をきっかけに疎遠になっていたホイットマン3兄弟。長男フランシスの呼びかけで1年ぶりに再会した次男ピーター、三男ジャックの3人は、失われた日々を取り戻すため、インドを横断する列車の旅に出る。彼らを待ち受けるのは、官能と混沌の国ならでは(!?)の予想外な出来事。車窓を流れるスピリチュアルな景色を見つめながら、彼らはそれぞれが抱えた心の傷をゆっくりと癒していく……。

96年の長編デビュー以来、世界中のファンに熱烈に支持され、かのマーティン・スコセッシをして「次世代のマーティン・スコセッシは彼だ」と評されるウェス・アンダーソンが、これまで描き続けてきたのは家族のドラマ。この『ダージリン急行』でも、彼はタイプの異なる3兄弟の姿を通じて、「家族とは何か？」という普遍的な問いを投げかけてくる。しかし、そんなシリアスなテーマを決して重苦しく表現しないのがウェスの奇才たる理由。ロマン・コッポラ、ジェイソン・シュワルツマンと共同執筆した脚本は、彼ら3人が実際にインドを旅したおかしな経験に基づいている。「日常のさまざまなことが、僕らが住んでいる世界とまったく違うんだ！それが脚本に反映されているよ」ウェスはこのように語る。エネルギッシュで“何でもあり”なインドの空気は、彼の洒脱（しゃだつ）なユーモア感覚と抜群の相性のよさを見せている。

スタッフ・キャストにも、素晴らしい顔ぶれが揃った。ホイットマン3兄弟の長男フランシスを演じるのは、ウェスの学生時代からの盟友であるオーウェン・ウィルソン。事故で大ケガをし、頭に包帯を巻きながら旅のツアコンを務めるフランシスを、独特の存在感で演じている。妊娠した妻との離婚を考える寡黙な次男ピーターには、『戦場のピアニスト』をはじめ、数々の作品で名演を見せてきたエイドリアン・ブロディ。そして、家族をネタに小説を書く作家、末っ子のジャックに、ウェス作品の常連で共同脚本も担当したジェイソン・シュワルツマンが扮している。

また、尼僧になるため息子たちを置き去りにした母親役をアンジェリカ・ヒューストン、カメオ出演としてビル・マーレイ、ナタリー・ポートマンが意外なシーンで登場するのも見逃せない。本編前に上映される短編『ホテル・シュヴァリエ』では、パリのホテルを舞台に、ジェイソン・シュワルツマン、ナタリー・ポートマンがミステリアスな男女の恋を演じる。このプロローグの意味も、本編を観ると深く心にしみてくるはずだ。

“ダージリン急行”の絢爛豪華なインテリアを筆頭に、細部までこだわったスタイリッシュな衣装デザインを手がけるのは、『マリー・アントワネット』などでアカデミー賞を3度獲得したミレーナ・カノネロをはじめとする、世界有数のクリエイターたち。ルイ・ヴィトンのチーフ・デザイナーで、ファッション界の革命児と称さ

れるマーク・ジェイコブスもスーツケースのデザインを担当し、この奇妙な旅を贅沢に彩っている。

本物の列車を借り切り、実際にインド北西部の砂漠地帯を走らせながら撮影した今回のロケーションも前代未聞。スタッフ・キャストが１台の列車に乗り込み、まるで旅をするように行われたこの撮影は、彼らの信頼関係を深め、ドキュメンタリーのようなリアルさを生み出している。

もちろん音楽も、これまでのウェス・アンダーソン映画と同様に魅力的だ。インドの巨匠サタジット・レイの映画音楽を、あたかもこの作品のために作曲されたかのように全編で使用。そしてキンクス、ローリング・ストーンズなど、60～70年代のブリティッシュ・ロックがエモーショナルに響きわたる。

生と死が交錯するインドを舞台に、ウェスが描き出すのはちょっと風変わりな３兄弟の愛と絆。ときにオフビートに、ときにせつなく駆け抜ける『ダージリン急行』を降りるとき、あなたの胸はやさしさや幸福感でいっぱいに満たされているにちがいない。

HOTEL CHEVALIER
『ホテル・シュヴァリエ』



パリのホテルで久しぶりに再会した元恋人同士。
彼らが繰り広げるエピソードとは……。



STORY

インド北西部を駆け抜ける列車・ダージリン急行に、長男フランシス(オーウェン・ウィルソン)の呼びかけで、次男ピーター(エイドリアン・ブロディ)、三男ジャック(ジェイソン・シュワルツマン)のホイットマン3兄弟が集う。彼らは父の死をきっかけに1年の間絶交していた。フランシスは、このインドの旅を通じてもう一度、兄弟の結束を固めようと皆に誓う。

彼らはそれぞれの問題を抱えていた。フランシスは、忠実な助手ブレンダンとともに旅の日程表を作り、まるで親のように弟たちの世話を焼く。彼の頭には包帯がぐるぐる巻きにされているが、バイク事故で瀕死の重傷を負い、奇跡の生還を果たしたばかりだった。ピーターは父の死後、遺品をひとり占めしているとフランシスにののしられる。妻のアリス(カミーラ・ラザフォード)は妊娠7ヵ月半だが、価値観の違いから、離婚を考えていた。ジャックは作家で、近頃「ルフトヴァッフェ修理工場」という彼らの家族をネタにした小説を書き上げたばかり。失恋の痛手を負ってダージリン急行に乗り込んだが、すぐさま列車のアテンダント、リタ(アマラ・カラン)と恋に落ちる。でも、かつての恋人が忘れられず、彼女の留守電を勝手にチェックしていたりする。

一緒に食事をすれば、やれツバが飛んだ、やれ義歯を外すなと、口論し、掴み合い、いがみ合う3兄弟。フランシスは次々と協定を作り、彼らを引率する。「心の旅では仲間割れしないこと。そして賢人をのけ者にしないこと」皆はくちぐちに言う。「意義なし!」彼らは人生を変える旅を必要としていた。

目の前に広がるインドの絶景が3兄弟の心を潤していく。ずっと行方不明になっていた母親(アンジェリカ・ヒューストン)が、ヒマラヤの修道院で尼僧をしていることもわかった。彼らは母親に会いに行こうと約束する。しかし、再び取っ組み合いの大ゲンカを繰り広げ、あえなく列車を追い出されてしまう。助手のブレンダンにも愛想を尽かされ、砂漠の真ん中で途方に暮れる3兄弟。別れ際、ブレンダンから渡された手紙には、母からの"会えない"という言葉が残されていた……。

空港を目指す彼らの前に、ロープをつたい川を渡ろうとするインドの幼い3兄弟の姿が見える。「ムチャだ」と思ったのも束の間、ロープは切れ、兄弟はもろくも激流に飲み込まれてしまった。慌てて救助に向かうフランシス、ピーター、ジャック。しかし、ピーターの懸命な努力もむなしく、幼い兄弟のひとりが岩場に激突し命を落としてしまう。亡骸を抱え、3人は彼らの住む村へ到着する。民族衣装に身を包み、ホイットマン3兄弟は厳かに葬儀に参列した。

空港へ到着した彼らは、1年前の父の葬儀を懐かしく思い出していた。3人が協力して、父を弔おうとしていたあの頃。インドでのさまざまな出来事を経て、それぞれが新たな思いを胸に抱き始めていた。フランシスはブレンダンに電話し、彼を再雇用することで話がまとまる。ピーターは妻アリスのお腹の中にいる子どもが男の子だとわかる。ジャックはかつての恋人とイタリアで再会することになった。フランシスは頭の包帯を取り、3人でヒマラヤにいる母親に会いに行くことにする。彼らはこの美しいインドの地で、いつの間にか兄弟の絆を深めていた———。

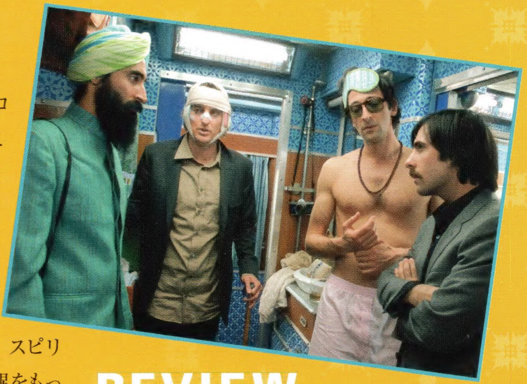




REVIEW 01

ウェス・アンダーソンの新たなオプティミズム

佐藤 久理子 映画ジャーナリスト



真っ白な麻のジャケットに白いパンタロン、足もとは素足にベージュのモカシン——『ダージリン急行』撮影中のウェス・アンダーソンの写真を見たときは驚いた。まるでヴァカンスでリゾート地に来ているような佇まいだったからだ。これまで何度か彼に取材する機会があったから、ずいぶんお洒落な人だという印象はあったものの、まさか撮影現場で、それも初めてインドの町中で撮影するときの姿がこれとは。しかも顔には余裕の笑みすら浮かんでいる。これまで彼のことを自分の世界にこだわる完全主義者だと思っていたが、この一枚の写真はそんなわたしの単純な印象に疑問符を投げかけるものだった。インドで自分のやり方を貫こうとすれば、絶対にこんな涼しげな様相ではいられないはずだから。

だが、その後幸運にも彼に話を聞くチャンスがあって、納得した。本作では、これまでの作品に比べ舞台がドラスティックに変化したのに併せて、映画作りのアプローチも変えたのだそうだ。セットを建て、自分のイマジネーションを具体化させるのではなく、フレキシブルにハプニングを取り込みながら進んで行くこと。「完璧にはコントロールできない状態でこそこの作品を撮りたかった」という。インドという環境、それ自体が映画の立役者なのであり、いわば主人公たちはその特殊な磁場に放り込まれたことによって初めて、他の兄弟そして自分自身と折り合いをつけて行くことになるわけだ。

尤も、アンダーソンの素晴らしさはそんなアプローチを取っても、決して彼特有のテイストが損なわれないところだろう。むしろ一層ユニークに独自の輝きをもって我々を魅了する。たとえばインドの鉄道会社から借り切り、地元の画家たちによって何匹もの象が描かれたという青いツートーンの汽車、レトロキッシュな車内、徐々にカジュアルにファンキーさを増して行く三兄弟の身なり。こうした装飾は、この監督の洗練されたセンスとインドならではのカラフルでエネルギッシュな質感との見事な融合だ。

アンダーソンの作品はつねに、心がばらばらになった家族をテーマにしてきたが、今回もそれは変わらない。プロローグ(短編『ホテル・シュヴァリエ』)はパリが舞台だ。ジェイソン・シュワルツマン演じる末っ子のジャックが、ホテルの一室で元彼女(ナタリー・ポートマン)の訪問を待っている。だが、訪れた彼女にひどいあしらいを受け、続く長編では傷心の彼が、父親の葬式以来疎遠だった長男の提案に従い、インドの地を踏むことになる。オートバイ事故で九死に一生を得たことで家族の大切さを思い知る長男、心の離れた妻が妊娠し揺れている次男、失恋の痛手から立ち直れない末っ子——それぞれに問題を抱えた性格の異なる三兄弟が、家族を捨てインドの山奥で修道女となり、父の葬儀にも立ち会わなかった母親に会いに行く。最初は衝突ばかりで珍道中を繰り広げる彼らだが、あるとき川で溺れる三人の子供たちに遭遇したことで、転機を迎える。ふたりは救ったものの、あと一息というところで三人目を失ってしまう。シュールなまでにコミカルな世界からシビアな現実へ、ここで映画のトーンが急変する。これはいままでのアンダーソン映画には見られなかった要素だ。この事件を機に三兄弟のあいだに絆が生まれる。幼い子供の死を目の当たりにしたことが彼らに生きる喜びを思い出させ、スピリチュアルな力を与えるのだ。その覚醒をもって、三人は彼らにとってのカーツ大佐(『地獄の黙示録』のマーロン・ブランドの役)と言えるような、母親に対峙するのである。

物語には絡まないが、幕開けを飾るビル・マーレイ(いわずと知れたアンダーソン映画の常連)のキャラクターも印象的だ。ぱりっとしたスーツ姿の彼が猛スピードのタクシーに乗って駅にやってくる。着くなりホームに駆け込むが、目当ての汽車はちょうど発車したところ。汽車に追いつこうと走り続ける彼の横にもうひとり必死で汽車を追う男(次男役のエイドリアン・ブロディ)が現れる。やがて彼はマーレイを引き離し何とか汽車に飛び乗るが、息を切らしたマーレイは追いつけず、ひとりホームにとり残される。このショットはまるで父と子の別れを象徴するような印象的な場面である。

自身も三兄弟のひとりというアンダーソンにとって、この物語はフィクションでありながらもきわめて自分の心情に近いパーソナルなものだそうだ。特に兄弟役を演じた三人の役者たち、また共同で脚本を書いたロマン・コッポラとは、まるで本当の兄弟のような親密さを分かち合ったという。そうして出来上がった映画は、今までの彼の作品以上にポジティブで晴れやかなトーンで終わる。兄弟が父親の喪から明け(旅の途中で彼らは、それまで大切にしていた父の形見のルイ・ヴィトン風旅行鞄を捨てる)、母親の呪縛からも解放され、帰路を目指して再び汽車に乗る。カメラが車内を移動して行くと、なぜか他の車両には冒頭のビル・マーレイや、ジャックの元彼女もいる。エピローグ的なこのシーンではみんなが一緒の汽車に乗り、どこかに向かっている。バックに掛かる音楽は明るくノンシャランな「オー! シャンゼリゼ」(冒頭のパリ編に繋がるようだ)。これはアンダーソンの精神的寛容さを示すものであり、彼が新たに手に入れたオプティミズムの表れといえるのではないだろうか。いろいろ辛いことはあったけれど、とりあえずみんな前進しようよ——そんな心がほっこりと温まるメッセージをもらった気になるのだ。

REVIEW
02

“We haven't located us yet”
～ウェス・アンダーソンの旅の作法を巡って

北小路 隆志 映画評論家

　やがて僕らはひた走る列車の軌道をなぞらえるように記述された映画史の書物を紐解くことになるだろう。世界で初めて撮られた映画群のなかの一本で、小さな駅のホームに列車が滑り込む様子を映し出す一分ほどの長さの『列車の到着』については、その列車が本当に自分たちに向かって飛び込んでくると錯覚して（？）観客が思わず逃げ出そうとした……といった“伝説”が広く流布している。それが実際に起こった出来事かどうかに意味はない。むしろ僕らは喜んでその微笑ましい“伝説”を受け入れ、リュミエール兄弟がラ・シオタ駅に到着させた列車にその後無数の人たちが乗り込み、大いなる冒険の旅へと出発したのだ……といった後日談として映画の歴史を振り返りたくなる。その列車は猛スピードで大地を突っ切るかと思えば、鈍行列車として先を急がず停車を続け、あるいは脱線や迂回を繰り返しもした。そして偉大な映画作家たちや凡庸なる映画作家もどきらが、それでも手を組んで走らせてきた列車としてある映画史は、その旅立ちから百年以上の歳月を経過させるなか、「アメリカ西部劇のヒーロー」のようにそこに飛び乗ろうとする一人の若いアメリカ人を受け入れた。そう、彼の名前はウェス・アンダーソン。この才能あふれる若者がひた走る列車としてある映画史の背後をひたむきに追いかけ、飛び乗ってくれたことの幸運を僕らは神に感謝さえしたくなる。彼は間違いなく映画史の現在において最重要な映画作家の一人であり、その古びた車両をサイケでありつつ陰影に富んだ色彩へと鮮やかに塗り替えてくれるだろう……。

　さて、僕がここまで書いてきたことは、ウェス・アンダーソンによる最新作『ダージリン急行』の冒頭の場面を念頭に置いている。アンダーソン作品でおなじみのビル・マーレイを乗せたタクシーがインドの街の雑踏を猛スピードで突っ走り、駅に到着するが、すでに彼が乗るつもりだった列車はホームを離れつつあり、それでもマーレイは諦めることなく列車の後を走り始める。だけどもう若くはない彼の足では追いつきそうになく、さらに後から列車を追いかけてきた若い男性（エイドリアン・ブロディ）がマーレイを追い越し、列車の最後尾に飛び乗ることに成功する……。そんな心踊る光景から『ダージリン急行』は始まり、だからこそ僕らは奇妙に屈折した三兄弟が体験する“心の旅”を目撃する権利を得るのだ。インドに旅をしろ、そうすれば君の世界観は変わるだろう……。思い起こせば、そんな誘惑めいた言葉を僕の耳元で囁くヒッピー崩れの人々（？）がいた。僕にとってそれは疑わしい言葉だった。結局、僕は一人でインドへ旅立ったが、それはインドに神秘を見出すためというより、インドに神秘なんてないことを確認するための旅だった。もちろんインドでの旅の体験は他で得がたい感動と共に僕の世界観に何らかの影響をもたらしたが、それは彼らが言う神秘とは別のものなのだ。だけど驚くべきことにアンダーソンは、ヒッピーたちが唱える神秘主義に盲従するわけでなく、またその一方で神秘への懐疑に拘泥することもなく、それらの二項対立的な争い（？）をきれいさっぱり一掃してしまうかのような“軽さ”でインドでの“心の旅”を映画の主題としてぬけぬけと選び、それを爽快なる傑作へと仕立て上げてしまう！

　では『ダージリン急行』での“心の旅”は僕らをどこに導くのか？　列車に飛び乗ること……。そうした旅＝映画の始まりが僕らに多くを告げている。かつてフランスのマルクス主義哲学者ルイ・アルチュセールは「観念論哲学者」と自身が組する「唯物論哲学者」をそれぞれ旅の作法の差異を通して定義づけたことがある。彼によると「汽車に乗るとき、始発駅と終着駅を、旅の始まりと終わりを、とっくに知っている人」こそが「観念論哲学者」であるのに対し、「唯物論哲学者は、アメリカ西部劇のヒーローのようにいつも走っている列車に飛び乗る人です。（略）彼は、何が起きるか予測できないままに、思いがけなく、偶然に生じてくることに立ち会い、汽車についても、旅客や窓から見える風景についても、限りない教えと観察を集めるのです」（『哲学について』今村仁司訳）。ここで哲学についての難しい議論をする必要はなく、僕らはただ『ダージリン急行』での“心の旅”が「旅の始まりと終わり」を設定することなく、あるいはそれが出来ないまま継続されることを確認すればいい。そんな意味で鍵を握るのが、線路を走るはずの列車がなぜか迷子（！）になるエピソードだろう。ラクダも歩く砂漠めいた場所で列車は立ち往生し、乗務員らは自分たちの居場所を知ろうと躍起になっている。そこで車中でもコンピュータを手放さない長男の助手は兄弟にこう告げる。“We haven't located us yet”、つまりまだ僕らは自分たちがどこにいるか特定できない……と。そう、この奇妙な響きを持つ言葉の連なりこそ、アンダーソン作品の登場人物がつねに直面する事態の要約としてあり、そうした自分たちが置かれた事態からの離脱を図るというより、その事実を確認し積極的に享受するためにこそ“心の旅”はある。前述の生真面目な助手によって設定された計画の全てが無視されるか破棄されるかし、途中で列車から追い出されさえしながら、つまりは「始発駅と終着駅」が不明のまま、兄弟の“心の旅”はいわば唯物論的な偶然に翻弄されながら展開されるのだ。映画の歴史はアンダーソンの登場によっていかに刷新されるのか？　そのことを知るために僕らは今しばらく彼が走らせる列車に同乗し、心踊らされる旅に参加する必要があるだろう。いずれにしても映画史において自分の居場所を特定できずにいること、そしてそのことを――むろん厄介な問題もはらみつつ――大いなる恩寵として受け止め糧とする態度にこそ、列車に飛び乗る旅人であるウェス・アンダーソンの天才と凄味が宿るのだ。


J.L.W.



CAST PROFILES

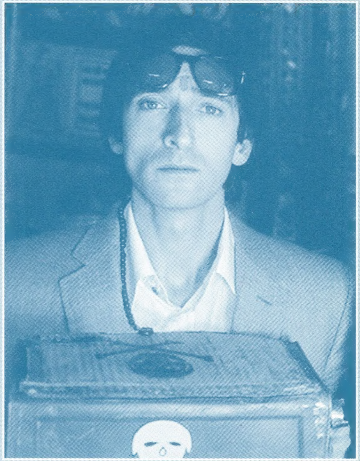


OWEN WILSON

オーウェン・ウィルソン

長男フランシス

1968年11月18日生まれ。俳優としても脚本家としてもハリウッドに確かな足跡を残し、多彩な顔を持つ。ウェス・アンダーソン監督とはテキサス大学時代に出会い、『アンソニーのハッピー・モーテル』(96・V)、『天才マックスの世界』(98・V)、『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』(01)、『ライフ・アクアティック』(05)などでコラボレーションをし続けている。『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』ではアカデミー賞、英国アカデミー賞の脚本賞にノミネートされ、批評家から絶賛された。その他の主な出演作には、『アルマゲドン』(98)、『ミート・ザ・ペアレンツ』『シャンハイ・ヌーン』(00)、『ズーランダー』『エネミー・ライン』(01)、『アイ・スパイ』(02)、『シャンハイ・ナイト』(03)、『80デイズ』(04)、『ナイト ミュージアム』『カーズ』(06)などがある。

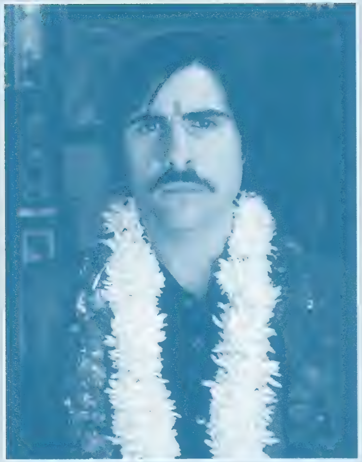


ADRIEN BRODY

エイドリアン・ブロディ

次男ピーター

1973年4月14日、ニューヨーク生まれ。パフォーミング・アーツ・ハイスクールを経てアメリカ演劇芸術アカデミーに学ぶ。初めて注目されたのは、スティーヴン・ソダーバーグ監督の『わが街 セントルイス』(93・V)。その後、エリック・ブロス監督の『ゼロ・ゲーム』(97・V)と『レストラン』(98)で主役を演じ、『レストラン』でインディペンデント・スピリット賞にノミネートされた。ロマン・ポランスキー監督の『戦場のピアニスト』(02)で実在のホロコーストの生き残りウワディスワフ・シュピルマンに扮し、アカデミー賞主演男優賞に輝いた。これは現時点までの主演男優賞部門最年少受賞者である。その他の出演作には、『シン・レッド・ライン』(98)、『ブレッド＆ローズ』(00)、『マリー・アントワネットの首飾り』(01)、『ヴィレッジ』(04)、『ジャケット』『キング・コング』(05)、『ハリウッドランド』(06)など。



JASON SCHWARTZMAN

ジェイソン・シュワルツマン

三男ジャック／共同脚本

1980年6月26日生まれ。98年に、ウェス・アンダーソン監督の批評家に絶賛されたコメディ『天才マックスの世界』(V)で、エキセントリックな高校生マックス・フィッシャーに扮し、劇場用長編映画デビュー。ビル・マーレイと共演したこの映画で、この年のシカゴ映画批評家協会賞新人男優賞の候補となった。最近では、ソフィア・コッポラ監督の『マリー・アントワネット』(06)でルイ16世を演じ、『奥さまは魔女』(05)ではニコール・キッドマンと、『ハッカビーズ』(04)ではダスティン・ホフマン、ナオミ・ワッツ、ジュード・ロウと共演した。その他の出演作にロマン・コッポラの劇場用長編映画監督デビュー作『CQ』(01)、アル・パチーノと共演した『シモーヌ』(02)などがある。



ANJELICA HUSTON

アンジェリカ・ヒューストン

母パトリシア

数々の賞に輝く女優／監督として、祖父ウォルターと父ジョンに始まる有名映画一族の伝説を引き継いでいる。『女と男の名誉』(85)で、ジャック・ニコルソン、キャスリーン・ターナーと共演し、アカデミー賞助演女優賞を獲得。その他の出演作に、父ジョン・ヒューストン監督の遺作『ザ・デッド／「ダブリン市民」より』(87)、『友よ、風に抱かれて』(87)、『ウディ・アレンの 重罪と軽罪』(89)、『グリフターズ／詐欺師たち』(90)、大ヒットした『アダムス・ファミリー』(91)と『アダムス・ファミリー2』(93)、『マンハッタン殺人ミステリー』(93)、『クロッシング・ガード』(95)、『バッファロー'66』(98)、『金色の嘘』(00)、『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』(01)、『ライフ・アクアティック』(05)などがある。



AMARA KARAN

アマラ・カラン

列車のアテンダント:リタ

本作で劇場用長編映画デビューを飾った。オリヴァー・パーカーとバーナビー・トンプソンが監督したイギリスのコメディ映画"St.Trinian's"(07)にも出演している。ロンドン生まれ。両親はスリランカ人で、オックスフォード大学で政治学を学んだ。大学時代から演劇を始め、地元の演劇界の新星スターとなる。しばらく投資銀行に勤めていたが女優の道を志して退職。2002年に、自ら脚本を書き監督し出演した短編映画"By Myself"が、シューストリング・ショーツ・デジタル・ビデオ・コンペティションで第2位となる。

CAMILLA RUTHERFORD

カミーラ・ラザフォード

ピーターの妻:アリス

HBOの人気テレビ・シリーズ「ROME［ローマ］」(05〜07)のジョカスタ役が印象深い。その他の映画出演作には、ドゥニ・アルカン監督の『しあわせの選択』(00・V)、ロバート・アルトマン監督の『ゴスフォード・パーク』(01)、アルキ・デヴィッド監督の『アクア・ブルー』(04・V)、ミーラー・ナーイル監督の『悪女』(04・未)などがある。最近では、ロバート・エドワーズ監督の"Land of The Blind"(06)で、レイフ・ファインズ、ドナルド・サザーランドと共演した。

IRRFAN KHAN

イルファン・カーン

村の聖職者

インドのニューデリーにある権威ある国立演劇学校の卒業生で、ミーラー・ナーイルの劇場用長編映画監督デビュー作『サラーム・ボンベイ!』(88)で俳優として映画デビュー。その後、個性的な容貌と鋭い眼差しで、インド系イギリス人監督アシフ・カパディアの大作"The Warrior"(01)で主役を演じた。ヒンディ語のこの映画は、英国アカデミー賞最優秀英国映画賞に輝いた。最近では、ミーラー・ナーイル監督の『その名にちなんで』(06)で、アメリカに移住したインド人に扮して国際的な名声を得た。また、アンジェリーナ・ジョリーが主演したマイケル・ウィンターボトム監督の『マイティ・ハート／愛と絆』(07)では、アメリカ人ジャーナリスト、ダニエル・パールを拉致した犯人を追う地元警官を演じている。



©manabu matsunaga

INTERVIEW

――『ダージリン急行』の企画は、どのように始まったのですか？ また、なぜインドだったのでしょうか。

そもそもジャン・ルノワール監督の『河』を観たことがきっかけでした。この作品は幼いイギリスの少女の視線を通してインドの生活が描かれています。ちょっと哀しい話ですが、僕はこの映画にとても感銘を受け、ぜひインドに行って撮影をしてみたいと思ったんです。実は、（フィルムのコレクターとしても知られている）マーティン・スコセッシ監督が、この映画のニュープリントを持っていて、おそらく僕が気に入るだろうといって特別に上映してくれたんです。

――『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』は、オーウェン・ウィルソン、『ライフ・アクアティック』は、ノア・バームバックとあなたは常に友人たちと一緒に脚本を書いています。今回は、主演のジェイソン・シュワルツマンとプロデューサーでもあるロマン・コッポラと共同で書いていますね。

僕はひとりで脚本を書くと煮詰まってしまうタイプなんです。今回は、3人の兄弟が列車のコンパートメントで顔を合わせるというオープニング部分を書いた段階でジェイソンを引き入れ、次にロマンにも声をかけました。僕は、その頃、パリで脚本を書いていて、彼らは『マリー・アントワネット』（ジェイソンはこの映画の中でルイ16世を演じ、ロマンはセカンド・ユニットを担当している）撮影のためにちょうどパリに居ました。ふたりとも長い友人です。3人で脚本を書きはじめたとき、僕たちは実際にインドに旅行して、この映画をシミュレーションしてみようということになりました。脚本を書きながら、同時に体験する。本物のアドベンチャーでしたね。これらの体験は映画にもさまざまなカタチで反映されています。

――あなたは実生活でも3人兄弟ですね。これまでの作品同様に“崩壊した家族”をベースにしながら、3人兄弟がそれぞれのアイデンティティーを探るという物語は自伝的な要素もあるのでしょうか。

ええ、僕には1歳半離れた兄と3歳下の弟がいます。8歳下の妹もいますが。実際に、兄と弟は僕の映画の一部ということができると思います。また、“崩壊した家族”というテーマについてですが、実際に僕の両親も離婚していて、それは僕たち家族の人生に

WES ANDERSON
ウェス・アンダーソン
監督／共同脚本／製作

1969年5月1日、テキサス州ヒューストン生まれ。オースティンのテキサス大学でオーウェン・ウィルソンとショートフィルム「BOTTLE ROCKET」を共同執筆し、『アンソニーのハッピー・モーテル』（96・V）で劇場用長編映画監督デビュー。その後、『天才マックスの世界』（98・V）では批評家から高い評価を受け、インディペンデント・スピリット賞の監督賞を受賞。アカデミー賞脚本賞にノミネートされた『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』（01）、『ライフ・アクアティック』（05）を手がけた。次回監督作は、ロアルド・ダールの児童文学「父さんギツネ バンザイ」を原作にした“The Fantastic Mr. Fox”。

大きな影響を及ぼしているんです。僕が常にそういうテーマを選んでしまうのも、おそらくそれが理由。でも、だからこそ日常的なディティールがインパクトのあるものになっているのじゃないかと思います。

——主人公たちは、列車での旅を選択しますが、なぜ、列車だったのでしょうか？

スタッフやキャストにアドベンチャーを体験して欲しかったんです。撮影中、僕等は毎日列車に乗ってラジャスターンの砂漠に出ていきましたが、なんども驚くようなことがありました。インドでの撮影は、順応性が必要です。どんなことが起こるか、まったく予想がつかない。小さなコンパートメントは大勢のスタッフが入れず、技術面では仕事がしやすい環境ではありませんが、撮影はとても打ち解けた雰囲気になり、こういう物語を撮影するにはよかったと思います。

——この映画のために特注されたルイ・ヴィトンのスーツケースがシンボリックに登場しますね。最後には、それを捨てていく…。

兄弟たちは、亡くなった父親のスーツケースを旅の間中、大事に引きずっています。その存在に取りつかれている。まるで、自分たちにどうしても必要なものだといわんばかりに。最後のシーンは、言葉で説明はいらないでしょう。

——父親はわざと登場させなかったのですか？

脚本の段階から完全なカタチでは、父親は登場していないんです。でも、もし登場させることになったとしていたら、きっとドナルド・サザーランドだったと思います。もちろん、もし彼が引き受けてくれていたらの話ですが。

——この映画の冒頭には、13分の短篇『ホテル・シュヴァリエ』がついていますね。ジェイソン演じる3男がインドへ旅立つ前に、パリのホテルで別れた恋人と再会する話です。このふたつの関係は？

あの短篇は、僕の自己資金で作ったもので別のプロジェクトのはずでした。短篇を撮影したときには、まだ『ダージリン急行』の全容は見えていなかったんです。ただ、ジェイソンは長編の方にも出演することになるだろうとは漠然と考えていましたが。短篇でナタリー・ポートマンがスーツケースになにかを入れますが、短篇のときにはその中身は何かは脚本に書いてはいませんでした。つまり、2本はお互いに影響し合って出来上がっていったんです。出来上がってから、これらの作品をどうやって上映しようという話になりました。でも、両方一緒に観てもらったほうが、ナタリーの存在の意味もわかり、よりいいと思います。

TEXT BY 立田 敦子 映画評論家





PRODUCTION NOTES 01

実際のインド旅行の体験を織り込んだストーリー

本作は、ウェス・アンダーソン監督が興味を持っていた3つの対象「列車」「インド」「兄弟」から誕生した。アンダーソンはこう語る。「以前から列車を舞台にした映画を作りたかった。移動するロケーションというアイディアが好きだからね」。

彼はこの映画を企画するまでインドへ行ったことは一度もなかったが、以前から、大好きな映画に登場したインドの風景にホレ込んでいた。アンダーソンは言う。「僕はインドで列車を舞台に3兄弟を描いた映画を作りたいと思った。それから友達のジェイソン・シュワルツマンとロマン・コッポラに一緒に映画の脚本を書かないかと誘って、3人でインドへ行ったんだ」。インドへ行く前、3人はしばらくパリで生活して脚本を書き始めた。シュワルツマンはこう振り返る。「最初僕らは、この映画の多くの部分を夜遅くにパリのカフェで書いたんだ。ところがある時、ウェスが、“インドへ行ったほうがいいかも”って言った。そこで、2006年の3月に3人でインドへ行き、僕らが書いている内容そのものを実際に体験することになったんだよ」。

かくして、アンダーソンとシュワルツマンとコッポラは、自身が実際に体験したインド旅行を脚本に織り込んだ。アンダーソン監督はインドについてこう説明する。「こんな場所はほかにないね。日常の様々なことが、僕らが住んでる世界とは全く違う。それが僕らの脚本に反映されている。この物語の90％は、話し合い、口論し合って、互いに理解し合おうとする3兄弟を描いてはいるが、僕らは、そうした会話をこの歴史ある国を突っ走る本物の列車の上でさせることが非常に重要だと感じたんだよ」。シュワルツマンは言う。「インドに行って僕らは様々なアイディアを手に入れた。それは誰も創作したり、想像できないことばかりだよ。とにかく素晴らしい体験だった。それを何らかの方法で映像にとらえることは非常に価値があることだった。あの列車とインドは、実際この映画の重要な登場人物になっている。その相互作用が面白い。最初、インドはただの背景で不鮮明だ。なぜなら3人の主人公は、外国のインドにいても自分の世界に閉じこもっているからさ。ところがやがて、3人はインドと正面から向き合わざるを得なくなり、彼らが求めていた本当の体験にどんどん近づいて行くんだ」。コッポラはこう言って締めくくった。「主人公3人を列車に乗せ、急速に混沌の中へ連れて行く。それでも彼らはうまくかわして先に進み、そして常に予想外な事が起きる。それがこの映画の精神さ」。

長男フランシス・ホイットマンについて

フランシスはボロボロの体で、必死に何かを求めている。登場人物の重要な鍵であるこの容貌は、アンダーソンが、決して忘れることができないある人物との偶然の出会いによって決定された。アンダーソンは言う。「ある時僕は、バチカンのサン・ピエトロ寺院で、顔に包帯を巻いたバイク・ジャケットの男を見かけた。頭の両脇はパッドの支えがあって、目の周りはアザで真っ黒。その男はこっちがぎょっとするほどぼんやりとそこを歩きまわっていた。彼の目には涙が浮かんでいた。その姿を見れば誰だってすぐに、彼が恐ろしく辛い目に遭ったことがわかった。僕は彼から目を離すことができなかった。その瞬間、オーウェンのキャラクターのインスピレーションが僕に与えられたんだ」。

フランシスを演じたオーウェン・ウィルソンはこう語る。「彼は、緊急事態だという思いが強くて、家族にもう一度まともな道を歩ませようと必死なんだ」。そして、フランシスが彼のアシスタントと一緒に綿密に計画して、ラミネートでカバーした旅行日程通りには物事はうまく進まない。それどころか日程通りに近づくことすらできない。ウィルソンは言う。「フランシスは、心安らかなスピリチュアルな体験をしたいなら、そのために努力しなきゃって考えるタイプなんだ。そこが滑稽だよ。何しろ、やり方にそんな風に強烈にこだわっていちゃ、心安らかもないだろ。まあフランシスのその思いとは関係なく、3人それぞれスピリチュアルな体験をすることになるんだけどね」。

ウィルソンは、3人の俳優が家族だとリアルな感情を持てるようになったのは、全てが自分の母国とは全く違うインドの列車に乗ったおかげだと言う。「この映画の撮影では、特に強い絆が生まれたと思う。インドに滞在したことによって、みんなが、本当の





意味で家族だなと感じるようになったんだ」。

次男ピーターを演じた エイドリアン・ブロディ

アンダーソンが、寡黙さと秘めた炎を合わせ持つピーター役に選んだのはエイドリアン・ブロディ。主人公3人の中で唯一アンダーソンと仕事をしたことがないブロディだが、すぐこの役に飛びついたと言う。脚本を読んだ彼は、さらにこの企画に魅了された。「この物語は美しいよ。なぜなら、3人がかなり辛い体験をするのに、それがとてもコミカルに、素晴らしく可笑しく描かれてるからだ。この脚本は、僕らが、直面する人生の問題をどう解決して行くかそのプロセスを美しく、そして普通より軽いタッチの視点でとらえていた」。

映画の最も痛烈なシーンのひとつ、3兄弟が場に不似合いな来賓として参列する村の葬式シーンについてブロディはこう語る。「ピーターにとって、それは打ちのめされるような体験だ。その衝撃の中で彼は、生きていることへの感謝と、生命を慈しむことを実感するんだよ」。すさまじく強烈で、すさまじく馬鹿げた出来事を、1枚の人生タペストリーのように織り込むことができるアンダーソン監督の能力こそが、この物語のトーンにとって重要な鍵となったとブロディは言う。「彼はとても明快で、それでいて独創的な人生解釈を持っている。そのため、この映画で何かが起きる時のそのタイミングが、その出来事をコミカルにするんだ。たとえ3兄弟が経験しているその出来事が笑いごとじゃなくてもね。ある意味で僕らは滑稽な状況の真っ只中にいる率直で真面目な連中なんだよ」。しかし、彼に求められたのは率直さだけではなかった。「川のシーンで、ウェスは僕にこう演出した。通常僕がやろうとすることの逆をやれと。存在感を誇示するのではなく、感情をブロックして事実に向き合えとね。僕個人としては、そんな風には対応しない。しかし確かにそのほうがずっと悲しそうだった。そのほうが、ピーターの対処の下手くそさが浮き彫りになったよ」。

三男ジャックを演じる ジェイソン・シュワルツマン

普段から常に長い時間をかけて自分が演じる人物について考えるシュワルツマンだが、今回、このジャック役は特に面白そうだと感じたと言う。「彼は髭をはやし、靴はなし。そして大きな、大きな夢を持っている。彼は本当にイイ奴だが、もう少しおとなになるべきだと僕は思う」。

シュワルツマンは、3人の俳優の真の仲間意識のおかげで、スクリーン上の3兄弟に命を吹き込めたと信じている。彼は言う。「僕にとって一番重要なのは、兄弟を演じる3人の俳優たちが心底お互いを大切に思っていることだった。こう言えて嬉しいよ。オーウェンとエイドリアンと僕の関係は素晴らしかった。3人で本当に素晴らしい時間を過ごせたよ。まるで兄弟そのものだったね。それに、列車の中ではどこにも行けないし！ 僕らはあの列車の中にいた。そこには男も女もヤギもいて、隠れる所などなかった。だから仲良くするしかなかったのさ！」。

アンダーソンとのコラボレーションについてシュワルツマンは、今回は前と全く違ったと言う。その理由の1つは、この10年でアンダーソンが監督として成長したからであるとシュワルツマンは思っている。「ウェスは前以上に集中力を身につけ、前以上に全てを知り尽くしているんだろう。でもね、この映画に関わるウェスを見ていて気づいたんだ。彼は、何が起ころうとうまくかわして進んで行き、どんなに予想外のことが起ころうと、なるがままにまかせようって姿勢だった。そこがウェスの素晴らしさだとね。それがインドの列車内での撮影中のウェスの姿勢だった。そしてその通りに僕らは体験したよ」。

尼僧になった母親パトリシアを演じる アンジェリカ・ヒューストン

アンジェリカ・ヒューストンは、尼僧になるために家族を捨てた母親役に自分がキャスティングされた点がとても気に入っていると言う。ヒューストンは告白した。「私は映画に登場する尼僧が大好き。6歳の頃だったか、真剣に尼僧になりたいと思っていた時期があった。ほんのちょっとの間だったけれどね。とにかく、尼僧っていうのはロマンティックで素敵だと思うわ」。

しかし3兄弟の母パトリシア・ホイットマンはみんながイメージする普通の修道院にいる尼僧ではない。ヒューストンは説明した。「彼女はね、私に言わせるとアクション・ヒーロー尼僧よ。彼女はかなり変わっている。彼女は、ヒマラヤで孤児たちと暮らすために、全てを捨てて新しい人生を始めたの。彼女を演じるのは、少しばかり“信念の飛躍”、つまり勇気と覚悟が必要だったわ」。

PRODUCTION NOTES 02



列車のアテンダント、リタを演じるアマラ・カラン

列車の女性客室乗務員リタはジャックと慌ただしい恋愛関係になる。そんなリタを演じるのは、アマラ・カラン。カランは言う。「リタはダージリン急行で生活し働いているの。彼女はとても知性的で冷静。車内サービスしたり、日常の雑務をするには少しばかり頭が良すぎる。彼女は、ホイットマン家の3兄弟を、もっと面白い可能性のある人生への扉だと見てるんだと思うわ。彼女にとって3兄弟はとても魅惑的なの。若くて元気なアメリカ人男性3人がぶしつけな振る舞いをしてる。彼らはひとりよがりで非常識だけれど、それでも生き生きとしていてカリスマティックでエネルギッシュ。リタは彼らのそういうところにたまらなく興奮するのよ」。

実はカランはインドへ行ったことがなかった。「私は、リタという女性がどこで生まれ、どんな人間か理解したかった。最初私は、リタをただの架空の女性としか思えなかったけれど、インドへ行って沢山の人たちと話し、インドの広大さと、急速に変化し発展しているインドの現状を見たら、リタのような人々が沢山いるのがわかった。ウェス監督は素晴らしいわ。だって彼は、インド文化に真っ向から対立するものに取り組みながら、本当に見事にインドを映画作りのプロセスにおいて必要不可欠で根本的なものにしたんだもの」。

本作の旅は、映画出演が初めてのカランとって新鮮なスピリチュアルな旅にもなったと言う。「素晴らしい学びの体験だったわ。あの狭い空間で、あの素晴らしい人たちと一緒に仕事ができた。まるで魔法のようだったわ」。

『ダージリン急行』の撮影　1

ウェス・アンダーソンは、本物の走る列車で本作を撮影したいと考えていた。最初このアイディアは、クリエイティブな面ではプラスでも、準備や手配の面で論外に思えた。「普通は列車を舞台にした映画を作る場合、セットを作って撮影するものだけれど、この映画ではそれは絶対にやらないことがはっきりしていた。誰がどんなにウェスにやめるように説得してもね」。そう語るのは製作のリディア・ディーン・ピルチャー。「私は、この映画の直前に『その名にちなんで』を撮影したばかりで、列車内の撮影を1日やった経験があったから、それがどんなに大変かよくわかっていたわ」。にも拘わらずアンダーソンの決意はかたかった。ピルチャーは続けた。「私たちはノースウェスタン・レイルウェイズ社が管轄する地域へ出かけた。実はあの会社はそれまで撮影を許可したことなんてなかったのよ。それでも私たちは果敢に彼らに頼んだの。客車10台の列車を3ヶ月借りたい。その車内の内装を全部外して、こちらの希望する内装に変えて、実際の線路を走らせたい！もちろん前代未聞よ。山のようなお役所仕事の連続。何度ももうムリと思ったわ」。

それでも彼らは何とか前進した。製作者たちがビザンチン・インド（ラージャスターン州はかつてビザンチン帝国の領土だった）のお役所仕事と格闘する一方、美術のマーク・フリードバーグは、紙の上で列車の内装をデザインし、インドのクラシックな列車や偉大なる列車旅行映画を研究した。









『ダージリン急行』の撮影　2

撮影カメラマンのロバート・イェーマンにとって最大の挑戦は、この列車内での撮影だったという。「列車内での撮影は常に非常に困難だ。ライトはどこへ置こう？ 車内の天井に何か吊すわけにもいかず、電話の柱や木が車両の脇のすれすれにあるため、90以上の機材を車体脇には設置できない。幸運なことにウェスとマークは、私の苦境をすぐに理解して、可能な限りあらゆる手段を使って私を助けてくれた。車両は改造され、可能な限り映画撮影に好意的な作りになったよ」。

イェーマンは続けた。「加えて我々は、ウェスが素早く動けるように、ライティング機材を車内構造に直接取り付けた。天井にキノやパラビームを配線して、露光が上がるようにし、事前に切っておいたゲルを使い、窓枠に簡単に取り付けられるようにして、走る列車の外が細かく見えるようにした。マークは、3兄弟が長い時間を過ごす寝台コンパートメントにはスライディングする壁を設置してくれた。おかげで必要な場所にカメラを置けた。それに客車の廊下の天井にはトラックまで取り付けられていたよ。それで、ドリーなしにカメラを動かすことができた」。

撮影が始まると、走る列車での作業の困難さは度が増すばかりだった。アンダーソンは文字通り、鉄道の運行スケジュールに合わせ、夜遅く走る列車や、走行中の遅れに対処しながら、働かなければならなかった。ピルチャーは最後にまとめてこう言った。「私たちはいつも計画を立て、対策を考えた。“これが起きたら、こうしましょう”とね。だからこそ彼は常にエネルギッシュでいられたのよ。彼はとても早く動きたかった。たとえ通り過ぎる列車を待って止まらなくちゃいけなくても、長い材木を取り出して、仕事を続けたわ。ほかの列車を通すために、私たちの列車から降りなきゃいけなかった時は、私たちの室内装飾デザインの古い車両をトラックに乗せ、砂漠へ運んだわ。とにかくどんな状況になろうとも、私たちは撮影をやめなかった。絶対にね」。

『ダージリン急行』の美術

美術のフリードバーグはこう語る。「最終的に我々は、インドの実際の列車に、オリエント急行のような豪華



な国際列車や現代のユーロ横断列車の雰囲気を合体させた。それに“20th センチュリー・リミテッド”を参考にしたよ」。（“20th センチュリー・リミテッド”はニューヨークを本拠地とした客車急行で、鉄道マニアたちには“世界で最も偉大なる列車”と呼ばれている）

そしてできあがったのが東西ハイブリッド・デザインだ。フリードバーグは言う。「我々は、ラージャスターン様式の柄模様とインド鉄道の色遣いに、モダンなアールデコ様式をブレンドした。ただし全てが、インドの伝統にのっとり手工芸だ」。

この列車に活気ある命を吹き込むため、フリードバーグは美術監督のアダム・ストックハウゼンとグラフィック・アーティストのマーク・ポラードと綿密に協力して、列車に使う色合いや風合いを選び、インドの伝統的な織物や染め物を使い内装を創り上げ、また彼らの指揮で、客車車体外部には、地元のペンキ職人たちが、何百頭ものゾウが描かれた巨大タペストリーを創り上げた。彼らは昼夜の2交替シフトを組み24時間働いて撮影に間に合わせた。

フリードバーグは、こうした地元の工芸家たちと一緒に仕事をすることによって、強烈なインスピレーションを与えられたと言う。「インドで働くのは、悠久の時を遡る旅だったよ。インドは真の手工芸の国だ。2つとして同じものはなく、機械的にぴたりと合うものはない。この最後の世代に関わることができたのは格別の喜びだった。彼らの仕事ぶりを見れば、より私的な美しい世界を体験できるだろう。もしこの客車をアメリカで作ったら、これと同じ豊かな個性と精錬さは絶対に出せない」。

最後にフリードバーグはこう語る。「とにかく、インドはインドそのままに、どんなに変わった状況だろうと、間違いだろうと起きたそのままに受け入れる。それが姿勢だった。ウェスはアナログな人間で、CG映像やその手のテクノロジーは絶対に使わない。彼は手作りのスタイルと伝統的な技術工芸が大好きだ。だからインドは、彼が働くには完璧な場所だったんじゃないかな」。

映画を支えた一流のアーティスト

本作では3兄弟のスーツケースのデザインも重要だった。中でも父親の遺品であるバッグは、この物語において要の存在だった。ホイットマン家の象徴である何かを創り出すため、アンダーソンは、ルイ・ヴィトンのデザイナー、マーク・ジェイコブスと再び手を組んだ。ジェイコブスは、この映画のためだけに、特別な、たった1つの製品系列のバッグをデザインした。アンダーソンは言う。「ルイ・ヴィトンは世界一素晴らしいスーツケースを作っている。なぜそう言い切れるかというと、僕がこの目で彼らの仕事ぶりを見たからさ。彼らは、何百本ものちっぽけな鋲を駆使して、注意深く複雑な工程でスーツケースを作り上げて行くんだ。ルイ・ヴィトンが作ったスーツケースはすさまじく丈夫で、砂漠を引きずり回そうと、川に放り込もうと、列車に投げて積み込もうと、実際にバンバン叩こうと、壊れないんだ。もちろん僕らが持っていたのは、1セットだけだったから、万が一壊れたら大変なことになっていたよ」。

この映画に関わった一流アーティストや工芸家全員が重要だが、何よりも、彼らの後ろにある最小限に倹約しようという精神が大切だったとアンダーソンは言う。「この映画の後ろには素晴らしいデザインをしてくれた素晴らしいデザイナーたちがいる。そして僕らは撮影現場で楽屋用のトレイラーを使わなかったし、メイクアップ・スタッフもいなかったし（ただし、オーウェンの外見に関しては、アンダーソンと長年組んでいるメイクアップ・アーティストのフランシス・ハノンが担当）、衣装スタッフもいなかった。僕らはインドに滞在している間ずっと、1つの家で共同生活し、全員が一緒に同じ体験に放り込まれた。この映画の体験で最も素晴らしいのは、俳優たち全員が真に心を通じ合わせたことだ。まるでこの映画の物語と同じようにね。それこそが、僕ら全員に素晴らしいインスピレーションを与えたんだよ」。



ウェス・アンダーソン監督の友人でもあるマーク・ジェイコブスが本作のためだけにデザインしたスーツケースも重要なアイテムの1つ


LANCER



दावत जूसर
मार्का नं.185102
DAVAT
Handy
GEL

STAFF PROFILES

ROMAN COPPOLA
ロマン・コッポラ
共同脚本／製作

映画界の巨人フランシス・フォード・コッポラを父として映画界の名家に生まれ、映画製作現場で育った。そのキャリアは、録音技師から、撮影カメラマン、脚本家、製作者まで多岐にわたる。初めて演出を手がけたのは、父が監督した『ドラキュラ』(92)。初監督作品『CQ』(01)ではカンヌ映画祭でプレミア上映され、批評家に絶賛された。最近では、妹のソフィア・コッポラが監督した『ロスト・イン・トランスレーション』(03)、『マリー・アントワネット』(06)、ウェス・アンダーソン監督の『ライフ・アクアティック』(05)でセカンド・ユニット監督を務めた。

SCOTT RUDIN
スコット・ルーディン
製作

主な作品は『アダムス・ファミリー』(91)、『ボビー・フィッシャーを探して』『ザ・ファーム／法律事務所』(93)、『身代金』(96)、『イン&アウト』(97)、『トゥルーマン・ショー』(98)、『スリーピー・ホロウ』『救命士』(99)、『アイリス』『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』(01)、『めぐりあう時間たち』(02)、『スクール・オブ・ロック』(03)、『クローサー』『ヴィレッジ』(04)、『ライフ・アクアティック』(05)、『クィーン』『あるスキャンダルの覚え書き』『ヴィーナス』(06)など。最新作にコーエン兄弟が監督した『ノーカントリー』(07)がある。

LYDIA DEAN PILCHER
リディア・ディーン・ピルチャー
製作

ニューヨークを本拠地とした製作会社シネ・モザイクの創設者である。最近では批評家に絶賛されたミーラー・ナーイル監督の『その名にちなんで』(06)と『悪女』(04・未)を手がけている。その他に『太陽に抱かれて』(95)、『カーマ・スートラ／愛の教科書』(96)、『チャイニーズ・ボックス』(97)、『クレイドル・ウィル・ロック』(99)、「ユマ・サーマンの運命の人を探して」(02)、「新しい私」(03)など。

STEVEN RALES
スティーヴン・レイルズ
製作総指揮

サンタモニカを本拠地とする製作会社インディアン・ペイントブラッシュを2006年に設立。映画業界の一流人材だけでなく優秀な新人の作品の製作と融資を行っている。創業1年目に本作をフォックス・サーチライト・ピクチャーズと共に、ウェス・アンダーソン監督の次回作“The Fantastic Mr. Fox”を20世紀フォックスと共に製作総指揮し融資した。

ROBERT YEOMAN
ロバート・イェーマン
撮影

ガス・ヴァン・サント監督の『ドラッグストア・カウボーイ』(89)で、その強烈なビジュアル・スタイルを確立し、インディペンデント・スピリット賞最優秀撮影賞に輝いた。その後、ウェス・アンダーソン監督のデビュー作『アンソニーのハッピー・モーテル』(96・V)を手始めに、『天才マックスの世界』(98・V)、『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』(01)、『ライフ・アクアティック』(05)を手がけている。その他の作品に、『ドグマ』(99)、『ビューティフル』(00)、ロマン・コッポラ監督の『CQ』(01)、『イカとクジラ』(05)などがある。

MARK FRIEDBERG
マーク・フリードバーグ
美術

手がけた主な作品には、『イン・ザ・スープ』(92)、『カーマ・スートラ／愛の教科書』(96)、『アイス・ストーム』(97)、『プリティ・ブライド』(99)、『ポロック 2人だけのアトリエ』(00)、『エデンより彼方に』(02)、『コーヒー&シガレッツ』(03)、『プロデューサーズ』『ブロークン・フラワーズ』『ライフ・アクアティック』(05)など。最新作はチャーリー・カウフマンの劇場用長編映画監督デビュー作“Synecdoche, New York”。

ANDREW WEISBLUM
アンドリュー・ウェイスブラム
編集

最近、ゾーイ・カサヴェテス監督の“Broken English”(07)の編集を手がけ、ノーラ・エフロン監督の『奥さまは魔女』(05)では追加編集を担当。手がけた主な作品には、『グレイス・オブ・マイ・ハート』(96)、『スネーク・アイズ』(98)、『セシル・B／ザ・シネマ・ウォーズ』(00)、『ファム・ファタール』『シカゴ』(02)、『スクール・オブ・ロック』(03)、『ア・ダーティ・シェイム』(04)、『ファウンテン 永遠につづく愛』(06)などがある。

JEREMY DAWSON
ジェレミー・ドーソン
共同製作

ダーレン・アロノフスキー監督の『π』(97)で映画業界にデビュー。その後、同監督の『レクイエム・フォー・ドリーム』(00)、ジュリー・テイモア監督の『フリーダ』(02)、ウェス・アンダーソン監督の『ライフ・アクアティック』(05)といった映画で視覚効果とアニメーションのデザインを手がける。『ファウンテン 永遠につづく愛』(06)では、加えてセカンド・ユニット監督としても働いた。最新作はウェス・アンダーソン監督の“The Fantastic Mt. Fox”。

ALICE BAMFORD
アリス・バムフォード
共同製作

映画カメラマンであり、映画作家であり、永遠の旅人でもある。プリンス・オブ・ウェールズ・インスティテュートで芸術と建築を学び、イギリスで開催される乗馬競技に何度も出場した。また、ヒマラヤ山脈で繰り広げられるカー・ラリーの唯一の女性出場者であり、インドのあちこちを馬に乗って旅した経験もある。彼女は、ウェス・アンダーソンと同じく、インドに対して熱い情熱を持ち、本作のインスピレーションとロケ地を求め、彼と共にインドを旅した。ウェス・アンダーソン監督の“The Fantastic Mr. Fox”では製作に携わっている。

ANADIL HOSSAIN
アナディル・ホサイン
共同製作

映画製作にかかわるあらゆるサービスを提供する会社ディリーウッド・インクの創設者である。ニューヨークを本拠地とした映画製作者として、主に国際的で多彩な文化のプロジェクトを手がけている。今年前半に全米公開されたミーラー・ナーイル監督の『その名にちなんで』(06)ではライン・プロデューサーを務めた。彼女が製作したボリウッド(インドのハリウッド)での作品には、カラン・ジョハール製作／監督の大ヒット作“Kal Ho Naa Ho”と“Kabhi Alvida Naa Kehna”(2本共ニューヨークが舞台)がある。

RANDALL POSTER
ランダル・ポスター
音楽スーパーバイザー

ウェス・アンダーソンの監督デビュー作『アンソニーのハッピー・モーテル』(96・V)で初めてコラボレーションして以来、本作を含めアンダーソンの監督作全て『天才マックスの世界』(98・V)、『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』(01)、『ライフ・アクアティック』(05)の音楽スーパーバイザーを務めている。アンダーソンとのコラボレーションで生まれた独創的で素晴らしいサントラは、世界中で数々の栄誉に輝いた。その他の作品は、『アビエイター』(04)、『ジャーヘッド』『イカとクジラ』(05)、『ゾディアック』(06)など。

MILENA CANONERO
ミレーナ・カノネロ
衣装デザイン

パリとロンドンで衣装デザインと芸術史を学ぶ。『バリー・リンドン』(75)、『炎のランナー』(81)、『マリー・アントワネット』(06)で3度アカデミー賞に輝き、『愛と哀しみの果て』(85)、『タッカー』(88)、『ディック・トレイシー』(90)、『タイタス』(99)、『マリー・アントワネットの首飾り』(01)でアカデミー賞にノミネートされている。その他の作品は、『時計じかけのオレンジ』(71)、『ミッドナイト・エクスプレス』(78)、『シャイニング』(80)、『ゴッドファーザー PART III』(90)、『めぐり逢い』(94)、『ソラリス』(02)、『オーシャンズ 12』(04)、『ライフ・アクアティック』(05)、『夜顔』(06)など。



『ダージリン急行』音楽の魅力

赤尾 美香 音楽ライター

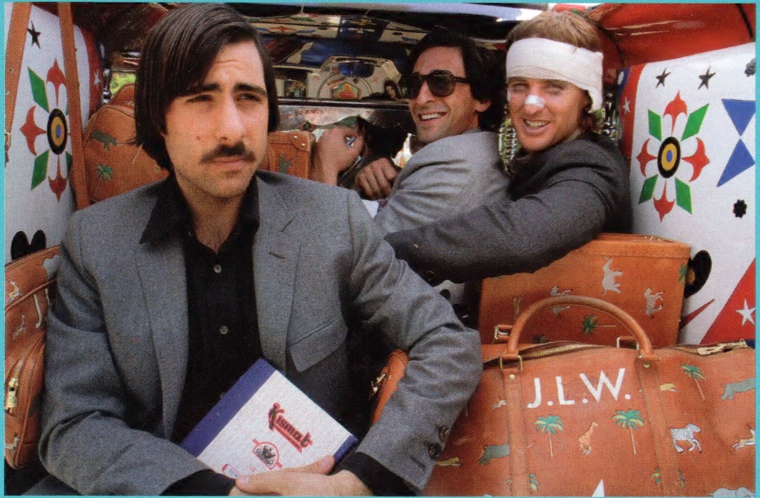
『ダージリン急行』のアイディアが生まれた時点でウェス・アンダーソン監督は、インドを訪れたことがなかったという。しかしながら、かねてよりインド映画を通じてかの地への思いを募らせていた監督は、脚本の共同執筆者であるロマン・コッポラ、ジェイソン・シュワルツマンと共にインドへ赴き、そこで体験した様々を本作に反映させた。私は、思うのだ。ここに集められ、鳴らされた音楽の多くは、憧れの地インドを往く監督の頭の中に流れていた音楽そのものなのではないか、と。

本作サウンドトラック盤に寄せられた監督のコメントは、こんな言葉で始まっている。「僕はインド音楽に詳しいわけじゃないけれど、サタジット・レイやジェームズ・アイヴォリー（&イスマイル・マーチャント）の映画のサントラは大好きなんだ」。

サタジット・レイはインド映画の巨匠にして、自らの映画はもちろん他者の作品でも音楽を手掛けた音楽家。ジェームズ・アイヴォリー&イスマイル・マーチャントは、英語によるインド映画制作を目的として61年にマーチャント・アイヴォリー・プロを設立し、『新婚生活』を皮切りに数多くの作品を制作。80年代以降は『眺めのいい部屋』や『ハワーズ・エンド』といった文芸ヒット作を生み出している（マーチャントは2005年に逝去）。

本作に引用されたインド映画音楽をいくつかピックアップしてみよう。監督が「いつ観ても最高のタイトル・シークエンスだ」と絶賛するアイヴォリー&マーチャント作品『ボンベイ・トーキー』からは主題曲の他、数々の名唱を残しているキショレ・クマール&アーシャ・ボースレイのコンビによる「タイプライター・ティプ・ティプ・ティプ」が。同じくアイヴォリー&マーチャント作品中アンダーソン監督にとってのベストだという『新婚生活』から、北インドの撥弦楽器サロードの第一人者ウスタッド・アリ・アクバル・カーンをフィーチュアした主題曲と挿入曲「アーネストの別れ」が。そして、監督が「そもそも僕が映画を作ろうと思ったきっかけの一部でもあった」と話すサタジット・レイ作品『二人の娘』の主題曲などが、色彩美溢れるインドの風景をより鮮明に見せてくれる。





「僕にこれほどの呪文をかけた映画の音楽を使うことができて心から喜んでいるし、こうして新しい文脈で流れる音楽が、みんなにも同じ呪文をかけてくれればいいと願っているよ」とは監督の言葉だが、インド映画の音楽に限ったことではない。本作においてアンダーソン監督は、ドビュッシーの「月の光」やベートーヴェンの「交響曲第7番」、ザ・キンクスやザ・ローリング・ストーンズのロック・チューンにも『ダージリン急行』という新しい文脈の中でもの言わせている。

例えばキンクスの3曲。オープニングに流れる「ディス・タイム・トゥモロウ」は、見知らぬ土地へとツアーの為に旅立つバンドの不安や期待が、主役を担う三兄弟のそれと重なる。三兄弟が父親の葬儀を回想するシーンで聞こえる「見知らぬ人」は、バンドのことを"同じ道を旅する他人同士（この曲を歌ったデイヴ・デイヴィスと、バンドのリーダーであるレイ・デイヴィスは実の兄弟だが不仲で有名）"と歌っており、これまた三兄弟の複雑な心情をうまく代弁している。ならば、音楽業界の権力者に対して「お前の思い通りになんかなるものか！」と反骨精神を剥き出しにした「パワーマン」が、ラスト・シーンで流されたその意図は？と、考えないではいられない。

もう1曲紹介しておきたいのは、センシュアルかつ神秘的な魅力に満ちた短編『ホテル・シュヴァリエ』と本編『ダージリン急行』の両方で流れる「ホエア・ドゥ・ユー・ゴー・トゥー（マイ・ラヴリィ）」。貧しい生まれながら今や有名人になってパリで贅沢暮らしのマリー・クレール。そんな彼女に向かって「心の中には何があるの？キミはどこへ行こうとしているの？」と問いかけるこの曲。本編の物語にさりげなく絡むエピソードが描かれた短編では、観ている者の脳裏に控え目ながら美しいインパクトを残すメロディと歌が、セリフの代わりを果たしていると言ってもいい。この曲の主であるピーター・サーステットはインドのデリー生まれ。同曲は1969年に英国チャートのナンバー1を獲得している。



『ダージリン急行』オリジナル・サウンドトラック
UICY-1400 ¥2,500（税込）

01
ピーター・サーステット／
ホエア・ドゥ・ユー・ゴー・トゥ

02
ウスタッド・ヴィラヤト・カーン／
「タイトル曲」
（サタジット・レイ作品『音楽ホール』より）

03
ザ・キンクス／ディス・タイム・トゥモロウ

04
サタジット・レイ／「タイトル曲」
（サタジット・レイ作品『二人の娘』より）

05
ジョティンドゥラ・ミットゥラ&
ウスタッド・アリ・アクバル・カーン／
「タイトル曲」
（ジェームズ・アイヴォリー&
イスマイル・マーチャント作品
『新婚生活』より）

06
サタジット・レイ／「ルークーの部屋」
（サタジット・レイ作品『象神万歳』より）

07
サタジット・レイ／「シャールーのテーマ」
（サタジット・レイ作品『チャルラータ』より）

08
シャンカール／ジャイキシャン／「タイトル曲」
（ジェームズ・アイヴォリー&
イスマイル・マーチャント作品
『ボンベイ・トーキー』より）

09
サタジット・レイ／「編集」
（ニチャナーンダー・ディッタ作品
『BAKSA BADAL』より）

10
ジョフール・シーク・テンプル・
コングリゲーション／祈り

11
ジョティンドゥラ・ミットゥラ&
ウスタッド・アリ・アクバル・カーン／
「アーネストの別れ」
（ジェームズ・アイヴォリー&
イスマイル・マーチャント作品『新婚生活』より）

12
サタジット・レイ／
「デザーテッド・ボールルーム」
（ジェームズ・アイヴォリー&
イスマイル・マーチャント作品
『インドのシェイクスピア』より）

13
アレクシス・ワイセンベルク／ドビュッシー:
「ベルガマスク組曲」より「月の光」
（ベルガマスク組曲第３番）

14
シャンカール／ジャイキシャン
（歌: キショレ・クマール&アーシャ・ボースレイ）
／「タイプライター・ティプ・ティプ・ティプ」
（ジェームズ・アイヴォリー&
イスマイル・マーチャント作品
『ボンベイ・トーキー』より）

15
ネルライ・ヴィレッジ・トルバドール／思い出

16
ザ・キンクス／見知らぬ人

17
ウダイプル女子修道院付属学校の
尼僧と生徒たち／
彼を讃えよ

18
フリッツ・ライナー指揮
シカゴ交響楽団／
ベートーヴェン:交響曲第７番
イ長調 作品92 第4楽章

19
ザ・ローリング・ストーンズ／
プレイ・ウィズ・ファイア

20
ウスタッド・ヴィラヤト・カーン／
「ベナラスの到着」
（ジェームズ・アイヴォリー&
イスマイル・マーチャント作品
『THE GURU』より）

21
ザ・キンクス／パワーマン

22
ジョー・ダッサン／オー！ シャンゼリゼ

CAST

Francis	Owen Wilson	フランシス	オーウェン・ウィルソン
Peter	Adrien Brody	ピーター	エイドリアン・ブロディ
Jack	Jason Schwartzman	ジャック	ジェイソン・シュワルツマン
Rita	Amara Karan	リタ	アマラ・カラン
Patricia	Anjelica Huston	パトリシア	アンジェリカ・ヒューストン

STAFF

Directed by	Wes Anderson	監督	ウェス・アンダーソン
Written by	Wes Anderson Roman Coppola Jason Schwartzman	脚本	ウェス・アンダーソン ロマン・コッポラ ジェイソン・シュワルツマン
Produced by	Wes Anderson Scott Rudin Roman Coppola Lydia Dean Pilcher	製作	ウェス・アンダーソン スコット・ルーディン ロマン・コッポラ リディア・ディーン・ピルチャー
Executive Producer	Steven Rales	製作総指揮	スティーヴン・レイルズ
Director of Photography	Robert Yeoman, ASC	撮影	ロバート・イェーマン
Producution Designer	Mark Friedberg	美術	マーク・フリードバーグ
Edited by	Andrew Weisblum	編集	アンドリュー・ウェイスブラム
Co-producers	Jeremy Dawson Alice Bamford Anadil Hossain	共同製作	ジェレミー・ドーソン アリス・バムフォード アナディル・ホサイン
Featuring music from the films of	Satyajit Ray and Merchant Ivory	挿入映画音楽	サタジット・レイ作品及び マーチャント＝アイヴォリー作品
Music Supervisor	Randall Poster	音楽スーパーバイザー	ランダル・ポスター
Costume Designer	Milena Canonero	衣装デザイン	ミレーナ・カノネロ
Francois Voltaire suitcases & costumes by	Marc Jacobs for LOUIS VUITTON	フランソワ・ヴォルテールの スーツケースと衣装のデザイン	マーク・ジェイコブス（ルイ・ヴィトン）
Suitcase wildlife drawings by	Eric Anderson	スーツケースの野生動物画	エリック・アンダーソン

フォックス・サーチライト・ピクチャーズ・アンド・カレッジ提供　アメリカン・エンピリカル作品
FOX SEARCHLIGHT PICTURES AND COLLAGE PRESENT　An AMERICAN EMPIRICAL PICTURE

ダージリン急行
THE DARJEELING LIMITED

2007年／アメリカ作品／原題：THE DARJEELING LIMITED／上映時間：（短編『ホテル・シュヴァリエ』13分・本編1時間31分）1時間44分
ビスタサイズ／ドルビーSR・SRD／DTS／日本版字幕：古田由紀子／オリジナル・サウンドトラック：ユニバーサル ミュージック
配給：20世紀フォックス映画　

www.darjeeling-movie.jp

発行日：2008年3月8日／発行者：藤原正道／発行所：東宝（株）出版・商品事業室 東京都千代田区有楽町1-2-2
発行権者：20世紀フォックス映画 東京都港区六本木3-16-33／編集：（株）東宝ステラ 東京都千代田区有楽町1-5-2
デザイン：ポンプワークショップ／印刷所：成旺印刷（株） 東京都港区芝2-1-28／定価：600円（税込）　http://www.toho.co.jp



東宝
阪急阪神東宝グループ

20th CENTURY FOX

T4988104037886